

特集にあたって

若 尾 政 希

日本の近世は、日本列島において初めて商業出版が成立し、版本と写本とが流通し読まれ書写された時代である。書物の登場とその普及は、一七世紀から現代までを書物の時代と一括りできるほどの大きな変革であった。

しかしながら、これまで、歴史研究において、書物や出版の問題は、なごらく等閑視されてきた。通史において取りあげられることがあっても、わずかに文化史の一齣として触れられる程度の扱いであった。史料調査の現場でも、——日本各地で史料調査が行われ文書の整理や目録の作成がなされてきたが——手書きの文書のみが重視され、書物はなごらく目録の「雑」の部に入れられ分析の対象となつてこなかった。

それに対し、九〇年代に入ると、書物に光があてられるようになり、書物に着目して書物を史料として歴史を叙述しようとする研究動向が出てきた。たとえば阪神淡路の大地震後の史料救済活動の中で、庶民が膨大な蔵書を持つこと

に新鮮な驚きを感じた横田冬彦氏は、畿内をフィールドにした蔵書調査から、一七〇〇年前後には畿内村落において知的読者層が成立していること、そして近世の政治支配はそのような在地社会の知の水準を踏まえた上での支配であったという刺激的な論点を提起した（『近世村落社会における〈知〉の問題』『ヒストリア』一五九、一九九八）。また「古文書返却の旅」（網野善彦、中公新書、一九九九）で、能登時国家の膨大な蔵書の整理に直面した橘川俊忠氏は、奥能登や関東をフィールドに蔵書の掘り起こしを行い、家・地域の総合的調査研究に蔵書研究が重要な位置を占めるといふ問題提起を行うとともに、「戸数三百ほどの村に、これほどの教養人がいたという事実をどう考えたらよいのだろうか。近世の「地方」は、現在（中略）よりもはるかに知的水準が高かったように思われるが、いかがであろうか」と述べている（『在村残存書籍調査の方法と課題』『歴史と民俗』四、一九八九、「近世文人・名望家の教養」同

一〇、一九九三)。そして、九〇年代の後半になると、「書籍史料論」(書物の史料論)が藤實久美子氏により提示されたのである(『近世書籍史料論に関する覚書』『史料館研究紀要』三一、国立国文学研究資料館史料館、二〇〇〇)。

二〇〇〇年には『歴史評論』六〇五号で「書物から見える日本近世」という特集が編まれた。そのなかで、青木美智男氏が、文書史料からは女性の政治性や社会性は知ることができないとして、式亭三馬『浮世風呂』を素材として、近世後期の江戸下層社会の女性の教育への関心の高まりや古典への知的欲求の広がりを描き、近世都市社会の研究に新たな一ページを付け加えた。この古典の成立について、横田冬彦氏は、古典が広範な読者に受け入れられ、本当の意味での古典となった時代が江戸時代だといひ、作者の立場から読者の立場に視点を移すと『徒然草』も『太平記』も江戸文学だと述べる。かつて目録の「雑」の部に入れられ、邪魔もののように扱われてきた手あかにまみれた書物がようやく日の目をみる時代がやってきたのである。今、歴史研究において、書物・出版に注目が集まっている。文書に加え書物をも史料としていかに歴史を叙述するのか、その可能性が問われつつあると言えるのである。

ところで歴史研究以外の人文科学に目を転ずると、近世文学、日本語学、書誌学、民俗学、宗教史等の諸専攻においても、近年とみに書物・出版への関心が高まっている。しかも、興味深いのは、研究者がそれぞれの専攻の枠を越えて、研究会に集い始めたことである。とりわけ二〇〇三年七月に、筆者が呼びかけ人になって設立した「書物・出版と社会変容」研究会では、これまで一八回もの月例研究会を重ねることによって、専攻を異にする研究者による協業が進み、共同討議を行うだけでなく、共同でフィールドワークを行ったり、さらには書物の資料論を模索するような機運まで出てきている。本特集は、「日本における書物・出版と社会変容」と題して、この研究会の成果の一端を収載したものである。『歴史評論』六六四号でも同趣旨の特集「日本近世の書物・出版と社会変容」が編まれた。併せて読まれることを期待したい。なお、研究会の設立・開催に際し、文科省科研費特定領域研究「東アジア出版文化の研究」から補助金を得た。二〇〇五年度からは日本學術振興会科研費基盤研究(A)「日本における書物・出版と社会変容」の交付を受けている。